様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　6 月　10 日現在

研究種目：特定領域研究
研究期間：2005～2009
課題番号：17083001
研究課題名（和文）：東アジアにおける死と生の景観
研究課題名（英文）：The View of Life and Death in East Asia

研究代表者
藪　敏裕　（YABU TOSHIHIRO　）
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：20220212

研究成果の概要（和文）：
仏教色の強いとされる寧波を中心とする華中沿岸域における「死」や「葬送」にまつわる習俗・慣習を調査し、その習俗を背景で支えている価値観の諸相を比較・考察し、仏教と道教との習合関係の実態を明らかにするとともに、葬儀屋の意識や葬儀内容の面で、特にここ５ー６年で大きな変化を見せていることを確認した。また、寧波地域と日本で「生の質」と「死の受容」のあり方に関する日中での意識の違いを比較考察するためアンケート調査を実施し、中国における医療観に「孝」の意識の強さと生の肯定が同居している点を明らかにし、近親者との情緒的関係の中で医療を考えがちな日本との違いを確認した。

研究成果の概要（英文）：
This study investigates the customs behind death and funerals in the Chinese mid-coastal region of Ningbo, an area where belief in Buddhism is said to be strong. Comparing the various values that support these manners and customs, this study reveals syncretization of Taoist and Buddhist doctrine while confirming a substantial change in funerary practices, especially over the last five to six years. Additionally, a survey was conducted in Japan and Ningbo to investigate differences in Sino-Japanese thought on “quality of life” and “acceptance of death.” It was revealed that the strong consciousness of filial piety and affirmation of life exist together in the view of healthcare in China. It was also confirmed that this differs from Japan, where healthcare is perceived as an emotional relationship between all close relatives.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	6,700,000	0	6,700,000
２００６年度	6,800,000	0	6,800,000
２００７年度	6,400,000	0	6,400,000
２００８年度	6,400,000	0	6,400,000
２００９年度	5,600,000	0	5,600,000
総　計	31,900,000	0	31,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・中国哲学
キーワード：寧波、仏舎利、景観、葬送儀礼、祖霊信仰、死生観、中国

１．研究開始当初の背景

祖霊祭祀に関してはすでにかなりの研究があるが、しかし古来より中国文化の窓口であった寧波や浙江省といった華中沿岸を調査対象とした比較文化的な研究報告は、ほとんど無いに等しい。本研究は既存の東アジアを対象にした祖霊祭祀研究に華中沿岸地域の実態調査研究を加えるだけでなく、それらの背景を遠く『詩経』にまで遡り、その思想的意義を解明するという点で、既存の研究に広がりと厚みを持たせる意味がある。また岩手県の遠野など、生活の中に死や冥界との往還を示す古い習俗が豊かに残る地域についての研究も存在はするが、しかし寧波から日本への文化が伝来した痕跡としては最も東側に位置する平泉を中心にした東北地域を、「喪俗」に関する「日中比較研究」の対象とした事例も皆無と言ってよい。その意味で本研究は、これまで別個に行われてきた研究を統合する可能性をも視野に入れている。

２．研究の目的

東アジア、とりわけ華中沿岸域と日本において「死」や「葬送」にまつわる習俗・慣習を調査しつつ、それら習俗の歴史的変遷や影響関係を明らかにするとともに、その習俗を背景で支えてきた思想や宗教、価値観の諸相を比較・考察することを目的とする。すでに我々「東アジアにおける死と生の景観」班（以後「景観班」と略称）は、平成 11-13 年度年研費基盤研究 B(2)の交付を受け、「祖霊祭祀の日中比較研究」を行ってきた。本研究は、さらにその研究成果をふまえ、東アジアに特徴的な祖霊祭祀や葬送儀礼（例えば哭き女）など、生と死にかかわる具体的な習俗や宗教的慣習を取り上げ、それらの歴史的変遷や伝播の道筋を辿るとともに、この地域での各習俗の存在形態を調査する。そしてその調査によって得られた事例やデータを解析する作業と並行し、それらの習俗・慣習の宗教的・思想的背景を文献的に探求・考察することにより、この地域における死生観の特質を体系的・構造的に明らかにすることを目的とする。その際、本研究のキーワードとなるのは「景観(Landschaft)」という概念である。「景観」とは単なる客観的風景や空間ではなく、その地域に生きる人の認識の質と程度に応じて把握され、しかるべき「機能と構造を有した空間の相貌」を意味する言葉である。本研究では、東アジア、就中、中国と日本において「死」やそれにまつわる諸事象が、現実の「生」を生きる人間主体にとって、どのような機能と構造を有してきたのか、そしてまた今後有することになるのか、という問題を視野に入れ、「生における＜死＞の布置と意味」を明らかにすることを目指している。このような「生きられる精神空間」の解明という意味を込めて「死と生の景観」という表題を採用した次第である。

３．研究の方法

本研究では、特に寧波を玄関とした中国大陸から太平洋ルートおよび日本海ルートを通って岩手に至る文化的影響関係を解明するにあたり、文献研究およびフィールドワークの両面からアプローチする。文献研究班は、思想史的研究を主眼とし、藪（研究代表者）が中国、中村が日本、宇佐美がその架橋的検証を担当、文献に表れ、あるいは隠されている日中それぞれの社会および精神文化における「死と生」をめぐる多様な景観に光を当て、その比較検討を行う。現地調査班（木村・脇田）は喪俗の中でも特に「哭泣」習俗に焦点をあて、日本（特に岩手、熊野、）および中国（寧波、曲阜、）でのフィールドワークにより、社会変容により次第に失われつつある個々の習俗に投影された「景観」およびその中に隠された汎東アジア的思考の枠組みの抽出を試みる。

４．研究成果

我々景観班は、現地調査としては、木村・脇田・藪がのべ四度にわたって寧波およびその周辺地域の葬送儀礼を対象に実施し、仏教色の強い寧波地区における仏教と道教との習合関係の実態を精査し、特に葬儀屋の意識や葬儀内容の面で、特にここ５ー６年で大きな変化を見せていることが確認した。(この調査の報告の一部は李広志「中国における葬送儀礼−寧波地区を例として−」(『から船往来』中国書店、東アジア地域間交流研究会（代表世話人静永健氏)、2009.6.2）を参照。)また、宇佐美は、平成18年度に、寧波地域と日本で終末期医療や老人介護に関する現地でのアンケート調査を実施し、現代の日中における庶民の死生観の比較検討をいくつかの論点に絞り行った。その一つは、調査や医療関係者からの聞き取りをふまえながらのもので、そこからうかがえる「生の質」と「死の受容」のあり方に関する日中での意識の違いを比較考察した。そこから明らかになった特徴は、中国における「孝」の意識の強さと、他方で現世での権利や生の肯定を前提にした医療観であり、この点で日本との若干の違いが見て取れたことである。

これらを現地踏査の結果を踏まえ、平成18

年度には「日本思想史学会2006年度大会」（10月21日・22日。岩手大学）において、景観班としてパネルセッション「霊魂観の行方−遺骨と魂魄をめぐって−」を企画実施した。このパネルは、司会が藪、報告は中村（一）と中村（安）、コメンテーターは脇田という分担で、その目的は、「遺骨収集」と「自然葬（散骨）」「樹木葬（納骨）」という二つの現代における葬送の景観を、霊魂と遺骨に関わる現代人の態度から思想史的に明らかにすることであった。中村（一）の報告は、浄土思想の興隆と霊場での納骨信仰の浸透する中で、遺骨（取分け白骨）が重要視されていく過程を報告、中村（安）は近世の儒者の魂魄観について、朱子学の霊魂観が日本においてどのように受け取られたかに注目し、朱子学から逸脱した独特の霊魂観・死生観が様々に形成されたことを報告、この二つの報告に対し脇田健一が散骨にみる＜個人化の死＞と、千鳥ヶ淵戦没者墓苑にみる＜英霊祭祀＞の問題を社会学の立場からコメントを行った。なお、最後にフロアーから、中村生雄氏から、現代の遺骨観に関して貴重なご意見をいただいた。（この件の報告は、『日本思想史学』（第39号　特別掲載〈2006年度大会パネルセッション〉31頁−34頁）を参照。）

この成果をまとめたのが平成20年10月に発表した『季刊日本思想史』第73号の「特集霊魂観の変遷」である。その内訳は、報告・コメントをまとめた中村一基「愛欲の骸骨・信仰の白骨」（後掲の〔雑誌論文〕②）、中村安宏「近世知識人の霊魂観−朱熹魂魄説からの逸脱」（後掲の〔雑誌論文〕④）、脇田健一「死者・生者関係の構造転換」（後掲の〔雑誌論文〕③）と、パネルを受けて新たに葬送儀礼中の「哭」の日本での変容を死生観や葬送儀礼の変遷のなかに位置づけたものが木村直弘「騒音としての哭声−その儀礼的機能の変遷をめぐって−」（後掲の〔雑誌論文〕⑤）である。また、藪は中国古代の詩に見える祖先崇拝のありようを日本のそれと比較し、現在の東アジアに見える祖先祭祀の原型はすでに『詩経』にみえることを明らかにした。（後掲の〔雑誌論文〕①）

平成21年7月23日に寧波大学において、東アジア、特に中国と日本における「死」や「葬送」にまつわる習俗・慣習の歴史的変遷を、浙東地域の役割に焦点をあてて考察することを目的に、ワークショップを開催した。

先ず画像石の研究者として知られる山東工芸美術学院人文芸術学院院長張従軍氏から、『華府到洞天一東晋南朝墓葬形制解読』と題した両漢時代から東晋期にかけての山東と華南地区の墳墓の形態及びそれに伴う埋葬品の変化などが紹介され、この変化は当時における人々の他界観（死生観）を反映しているとの報告があった。これに対し、漢代の地下墳墓への埋葬と墳墓の画像石に描かれている西王母のもとへの昇仙の整合性についての質問があった。

次いで、日中比較文化が専門の清華大学人文社会科学学院歴史系副教授劉暁峰氏から、『雷神の日中比較研究』と題して、上賀茂神社の起源伝説を記述する日本の文献と中国古代における雷神信仰の比較から、越地域の稲作文化の伝播とともに浙東地域の雷神信仰が日本に伝来し、上賀茂神社の雷神伝説として取り込まれたとの報告があった。これに対して、雷神の複数の系統についての資料的根拠がどうであるかとの質問、古記録による上賀茂神社の競馬神事における馬の異装の源流には、中国の越の雷神信仰との関連が指摘される等の意見があった。

また、「一般社会への成果の還元に積極的に取り組み、参加費無料の公開講演会や市セミナー等を独自に企画してわかりやすく 研究内容を発表する」という当初の目的を実行するため、特定領域研究内の王権班等の協力を得て平成18年９月９日に講演会「東アジアの中の平泉」（三輪嘉六九州国立博物館館長、中村英俊岩手県教育委員会事務局世界遺産担当課長・小島にんぷろ代表）を開催、同11月25日には国際シンポジウム「東アジアのなかの平泉－第7回平泉文化フォーラムー」を開催した。この成果を、景観班関係者が多数執筆した『東アジアの平泉』（勉誠出版、アジア遊学102号、2007.8.30）と言う形でまとめることとなった。さらに、平成19年2月2日には国際シンポジウム「東アジアのなかの平泉－第8回平泉文化フォーラムー」を開催した。平泉文化フォーラムはこの後科研費交付の最終年である第10回大会まで主催者として参加した。

さらに、社会への研究成果の還元と我々の班に専門家がいない点を補うため、平成18年3月１日には清華大学人文社会科学院歴史系の劉暁峰副教授を招聘して春・秋の墓参は陰陽思想の関係の公開講演会「墓参時期からみた中国人の祖霊信仰」を実施した。この後18年度には、アジアにおける葬送儀礼の発生・展開に関する思想史的考察を行うため高知大学遠藤隆俊教授を迎えて6月17日に研究会「中国宋代の祖先祭祀と墳墓、祠堂」を、韓国の葬送儀礼について詳しい東亜大学崔吉城教授を迎えて7月9日に研究会「朝鮮半島における死者儀礼と国家」を、民俗信仰班の関西大学二階堂善弘教授を迎えて７月30日に研究会「中国の民衆における信仰と冥界観」を、10月26日には寧波で張如安寧波大学文学院教授の講演会「宋代寧波人の死生観」を、日本人の死生観の形成と展開において儒教が果たした役割・死をめぐる習俗や民間信仰との関わり方に注目して考察するため、東京大学の黒住真教授を迎えて9月10日に研究会「近世日本思想の死生観からの問い」をそれぞれ実施し

た。また平成19年度には、葬送儀礼の変化に着目しながら、前近代を中心に日本における死生観の変貌に関する思想史的考察を行うため佐藤弘夫東北大学大学院教授を迎えて６月30日に研究会「死者のゆくえ一日本における死生観の変容一」を、「供養」と「慰霊」の異同を種々の角度から検討することによって、日本における生者と死者の多様な関係とその変遷を考えるため中村生雄学習院大学文学部教授を迎えて9月8日に研究会「供養と慰霊－誰が、何を供養／慰霊してきたか？－」を、朱子学と陽明学の死生観について考察するために牛尾　弘孝大分大学教育福祉科学部教授・荒木　龍太郎活水女子大学文学部教授を迎えて11月24日に研究会「垂加神道の死生観--山崎闇斎と若林強斎を中心にして--」「陽明学における死生観の諸相」を、12月１日にはインドの宗教について考える為にBrij Tankhaデリー大学教授の講演会「インドの社会と宗教」を、それぞれ実施した。さらに平成20年度には、日本とアジアの中間に位置する琉球弧の死生観を考えるため、酒井正子川村学園女子大学教授を迎えて7月12日に研究会「琉球弧の葬送歌（＝哭きうた）にみる死生観」を、ギリシャ人の死生観を考えアジアと比較するため、逸身喜一郎東京大学大学院教授を迎えて9月6日に研究会「ギリシャ人は神様をどのように考えていたか」を、現代中国人と江戸時代の日本人の死生観を比較考察するために王中忱清華大学教授・韓東育東北師範大学教授を迎えて11月29日に研究会「魯迅における生と死」「武士道における死の価値観について」を、12月13日には、医療現場に携わる人々と日本人の死生観についての考えを共有する試みとして岡部健氏・相澤出氏・本村昌文氏の講演会「日本の看取りの意識の重層構造－在宅死を見つめるなかで－」等を、それぞれ実施した。

今後の課題としては、朝鮮半島と琉球弧についての考察を深めていくこと、また寧波地区とそれ以外の中国の各地域との関係についてより詳細な検討が必要なこと、またそれぞれの地域の現地調査を積み上げつつその通時的変遷の背後にある精神史とでも呼ぶべきものをより明らかにしていくことが必要である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２４件）

① 藪　敏裕、「『詩経』に見える祖霊　周頌・清廟之什の祖霊祭祀を中心に」アジア遊学、査読無、110 号、2008、160-167 頁

② 中村一基、「愛欲の骸骨・信仰の白骨」『季刊日本思想史』、査読有、第 73 号、2008、22-36 頁

③ 脇田健一、「死者・生者関係の構造転換」『季刊日本思想史』、査読有、第 73 号、2008、55-74 頁、

④ 中村安宏、「近世知識人の霊魂観-朱熹魂魄説からの逸脱」『季刊日本思想史』、査読有、第 73 号、2008、37-54 頁、

⑤ 木村直弘、「騒音としての哭声-その儀礼的機能の変遷をめぐって-」『季刊日本思想史』、査読有、第 73 号、2008、75-100 頁、

⑥ 宇佐美公生、「日中の終末期医療に関するアンケート調査に基づく生命倫理の比較文化論的研究」『岩手大学教育学部研究年報』、査読有、67 巻、2008、17-36 頁、

〔学会発表〕（計８件）

① 藪　敏裕、中村安宏、中村一基、脇田健一、「霊魂観の行方-遺骨と魂魄をめぐって-」、日本思想史学会、2006 年 10 月 21・22 日、岩手大学

〔図書〕（計５件）

① 藪　敏裕、その他、中国書店、『から船往来』、2009、1-313 頁、

② 藪　敏裕、菅野文夫、中村一基、脇田健一、木村直弘、その他、勉誠出版、『東アジアの平泉』（アジア遊学 102 号）、2007、4-166 頁、

③ 藪　敏裕、中村一基、脇田健一、その他、勉誠出版、『アジアの心と身体』（アジア遊学 110 号）、2007、4-176 頁、

〔その他〕

ホームページ等

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/maritime/

６．研究組織

(1)研究代表者

藪　敏裕　（YABU　TOSHIHIRO）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：20220212

(2)研究分担者

中村　一基（NAKAMURA　KAZUMOTO）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：20133895

宇佐美　公生（USAMI　KOUSEI）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：30183750

木村　直弘　(KIMURA　NAOHIRO)
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：40221923

中村　安宏　(NAKAMURA　YASUHIRO)
岩手大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号：10282089
（H20～研究分担者）

脇田　健一　(WAKITA　KENICHI)
龍谷大学・社会学部・教授
研究者番号：00305319

※研究協力者

菅野文夫（KANNO　FUMIO)
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：63710191

斉藤利男（SAITO　TOSHIO)
弘前大学・教育学部・教授
研究者番号：90162213